

ジョンソン軍曹の転生 【仮】

アルファデッド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ジョンソン軍曹のあっさりとした最後の死に方が可哀想だから、FGOの世界に無理やり転生を

してみた駄文製造機の作者の欲望の塊です。

続く予定は今の所はない。

スランプ時に書いたものです。

目次

始まり

1

よく分からん！

8

始まり

フラッドの抵抗をなんとか払い退けて、HALOのコントロールルームまで進み、起動させるだけのはずだった。

「彼女は守ってみせる」

マスターチーフからコルタナが入っているチップを受け取って、スパルタンレーザーを担ぎながら装置に向かった。

球体のロボット野郎がどっかから出来てきた。

343ギルティ・スパーク「おや、聞いてください！私のリングがもうすぐ完成するんです！」

「そりやすーい」

適当に答えて歩みを緩めなかった。

343「シユミレーシヨンの結果によると確約は出来ませんが、まもなく完全に起動可能状態に達するはずですよ。あとほんの数日ですよ！」

その前に人類が滅びてしまうぞ。

「あいにくそんな待てねえな。」

なんかゴタゴタ言っていたが、無視して起動をしようとしたら後ろからビームを撃たれた。

「アアアア!!!」

意識が朦朧として、もうこれは助からないということは分かった。

あのロボット野郎!!?

スパルタンレーザーの発射音が聞こえ、爆発がした。

チーフがやってくれたか。

身体がすげえ痛む。

チーフ「今連れ出してやる」

チーフには迷惑はかけてられん。

もうダメだ。

「いや、やめておけ。これを…放すなよ、もう二度と…彼女を放すんじゃない」

チップだけを渡して、俺は死んだ。

そのはずだった。

地獄にでも落ちたかと思ったら、そうではなかったらしいな。
いや、ある意味地獄か。

俺の生まれ故郷のロサンゼルスとは全く違う。

まさか、また生き延びたのか。

そんなはずはない。チーフにチップを渡したら死んだはずだ。
HALOにいたはずだ。

ここは地球なのか。

だが、廃墟にしても見ない設計だ。

周りは火の海で瓦礫、廃墟しかない。

持ってなかったはずのアサルトライフルとハンドガンは何故か持っている。

(棍棒と石ころさえあればなんでも出来る。それが海兵隊だ)

帽子も被っている。

取り敢えず、葉巻を吸うか。

ポケットからいつもの葉巻とオイルライターを出して、葉巻を啜えて火をつけた。

まず、状況整理だ。

あのロボット野郎に撃たれて死んだ。

起きたら火の海だ。

アサルトライフルとハンドガンはある。

ここが地球？

意味が分からん！

なんか変な知識が入れ込まれたような気がする。

バーサーカー？そんなもん知らねえな。

聖杯？馬鹿な。

身体能力が上がっている。喜ばしいことじゃねえか。

チーフは生き延びたのか。

コルタナを無事に持つているだろうな。

アービターは生きてんだろうな。

俺が死んでもチーフが生き延びてたらそれでいいんだ。

もう68だしな。(コールドスリープによって実年齢と外見年齢がかけ離れている。外見は30〜40代です。とても高性能なおっさんです。)

アサルトライフルのマガジンに弾が入っていることを確認して弾込めをして軽く構えた。

一応フル装備のようだな。

『いやあああああああああああああああああ!!!』

おっと、悠長に葉巻を吸っている場合ではなかった。

声がる方向へと走った。

俺の若い頃よりも遥かに早いぞ☒

こんな身体能力があったらコヴナントなんてイチコロだったな。

クソーツ！生きてる時に欲しかったぞー！

そんなことより女性がなんか知らんが頭蓋骨の野郎に襲われているな。

何使ってたんだ？手から光の玉が頭蓋骨の野郎に当たってなんとかしようとしている。

ハイヒールを履いてやがる。助けるか。

アサルトライフルを構えて、狙いを定めて胴体を撃ち抜きながら進んで倒して行った。

ダダダダダダダッ！

我がUNSCが誇るアサルトライフルを前に頭蓋骨はバラバラに砕けた。

オルガマリー所長Side

最悪！

爆発で瓦礫の下になってたら一般人のあいつが来て、レーシフトが始まって気がつく
とここにいた。

そして蓋骨に襲われている。

数が多過ぎて距離を取ろうとして走ったけど、ヒールで走るのが間違이었다。

転んでしまった。

抵抗しようにも距離を詰められて、もう無理よ。

ダダダダダダダダダダダッ！

なに☒

骸骨が次々と砕かれていた。

何が起きたか分からなかった。

気がついたら骨の山が出来ていた。

??? 「嬢さん、大丈夫か？よくヒールで走ろうと思ったな」

声が渋いをして髭を生やした黒人が銃を持ちながら近づいてきた。

変な鎧に帽子と葉巻？

??? 「俺はジョンソン軍曹だ。気軽にジョンソンと呼んでくれ」

サーヴァントなの？真名を簡単に明かしてはいけないはずよ。

聞いたことがない英雄だわ。

遠い違う時間軸から来た軍曹と所長の出会いであった。

よく分からん!

ジョンソン軍曹 Side

なんでこんなところで女がいるんだあ？

明らかにこんな場所に来るのに適した服装と思えないが、まあいいか。困っていることには変わりはない。

にしても、どこの人なんだ。

髪の毛は白いが、アルビノというわけではないしな。

高貴な人という雰囲気はあるがな。

??? 「オルガマリー所長！」

また女の子か。

えらく目の毒になるような格好をしてやがる。

ジエンキンスとかが喜びそうだな。

ジエンキンス、助けてやれなくてすまない。

そして弱そうな青年がきたな。

こいつは日本人か中国人どっちだ？

所長「貴方たち!?どうなってるのよ!!」

敵意はなし、お互いは面識はあるようだな。

???「所長、お怪我はありませんか」

所長「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一体どういうこと?」

???「・・・・・・・・わたしの状況ですな。」

信じられない事かもしれませんが、実は」

所長「デミ・サーヴァントでしょ。そんなことは見たら分かるわ。」

訊きたいのはなんで今になって成功したって話よ!!

それより貴方!

私の演説に遅刻した一般人の貴方!」

??? 2 「?!」

なんか分からんが、あまり騒ぐとまた奴ら来るぞ。

「なんで貴方がマスターになっっているの?」

一流の魔法師しかサーヴァントと契約出来ないはずよ!

アンタはマスターになれるはずがないわ。

乱暴働いて言いなりにしたの!」

おいおい、それはないだろ。

「それはありえねえな。この女の子がどう見ても強いだろうが。

さっきの頭蓋骨みたいな野郎と戦ったんだぞ。

ひ弱なそいつが乱暴を働いたとは思えんが、

???、
??? 2 「?!」

??? 2 「ひ、ひ弱・・・」

所長 「貴方は黙ってなさい！」

「話を聞け！」

悪いがあんなひ弱な奴が乱暴を働けるとでも思うか？

今時の女は男を張り倒すだけの教育はされているぞ」

所長 「ツ！・・・確かにそうかもしれない」

ハツとした顔をして納得してもらえた。

とりあえず落ち着いてもらった。

それで納得してくれたのはなんか複雑な気分になってしまったが、静かにする目的は果たせたからいいか。

これ以上騒がれると連中が寄ってくるからな。

周辺を警戒している間にどうやら状況説明をしていたようだが、なんか大事に巻き込

まれた感じか？

いつものことがだな。

「貴方は誰ですか？」

「おっと、俺はジョンソン軍曹だ。ジョンソンと呼んでくれ。」

「そうですか。私はマシユ・キリエライト」

「僕は藤丸立花です」

近づいてお詫びをした。

「さっきはひ弱いと言って悪かったな。」 コソコソ

立花「は、はあ」 コソコソ

「見た感じだとお前はルーキーか何か？」 コソコソ

立花「っ！そうです」 コソコソ

「それは災難だったな。あの女は司令官か？」

マシユ「実は、かくかくしかじか・・・」

「なるほど、なかなか頭のいかれたことをやるもんだな。」

カルデアという組織・・・でタイムスリップ紛いのとをやって人類を救うらしいが、良くわからん。

だが、人類はなんかよく滅亡の危機に良く遭うな。

しかし、それだけならよかったで済む話だったが、どうやら話を聞く限りかなりききな臭くてこいつらを放っておくわけにはいかないかと直感が俺に語っている。

こういう時に限って嫌な予感精度100パーセントを誇るんだ。

まったく、幸運にことごとく見放されるな。俺は・・・

「事情は俺にはよく分らんが、お前らと一緒に行こう。」

マシユ「いいんですか？」

「人が困っているのを放置できるほど、俺は堕ちていない。あと、人多い方がいいだろ」

立花「そうですね」

実際は情報収集をしたいし、現地民とはいかないが仲良くしておくのが得策。

所長「話は終わった？ここからは私の指示に従ってもらいます。まず、ベースキャンプの作成ね。」

ベースキャンプか、ここに長くいたくはないがどうやらここが霊脈つてやつがここに
あるようだ。

マシユ「・・・所長の足下だと報告されています。」

所長「うえ！あ・・・そうですね・・・」

なんだ、所長つてやつは嫌な奴かと思つたが違つたようだ。

所長（なんかすごい生暖かい視線を感じるのは気のせいかしら）

「周辺警戒をしておく」

マシユ「お願いします」

盾を地面に置くと周りが光、見たこともない部屋になっていたところに声が聞こえた。

ロマン「よし、通信が戻ったぞ」

チャラそうだが、なんかこいつは抱えている。

デカくてヤバイ秘密を隠しているな。

そんなことを考えていると、話が進んでいるがどうやらカルデアはかなり危機的状況にあるようだ。

しかも所長は爆発に遭ったのに無傷・・・無傷だと!!

あと、さすがはトップに任されているだけはある。

判断が早い。

なんか言ってることは無茶に聞こえるのは幻聴としておこう。

だが、レフってというやつに依存しているが、大丈夫か？

そいつの名前を聞いて、なーなーんか昔の嫌な思い出が出てくるな。

所長の動向に注意する必要があるな。

ちよっと仕掛けをするもは問題ないだろう、、相手にバレなければいいからな

どうやら方針は決まったようで、とりあえずはこのエリアの探索をすることになった。

燃え盛る街を背景に周囲を警戒しつつ、大きな橋に差し掛かったところで所長が急に止まった。

所長「ストップ。探索の前に、藤丸は私に言うことがあるでしょ」

立花「???。特にはないはず」

おつと、これはなんかめんどくさそうな事情か？

所長「本気? 管制室でのことを思い出しなさいよ!」

マシユ「先輩、きつと管制室でレムレムしていたことですよ。すぐに思い出せます。

あれは、、」

レムレム?、レム睡眠のことか?!

話を聞くとどうやら坊主が悪いようだが、それは流石に俺は底い切れないぞ。

俺もルーキーの時にそれをやってひでえ目にあつたからなあ、なんか懐かしいな。

つて、クソ! 殺意を感じるぜ。とんだでもねえところに俺は飛ばされたな。

神よ、いるなら恨むぜ。

「敵だ! (敵性反応です!)」

マシユと被つたが、それより気配が薄いのが、弾幕を張ればこつちに近づける範囲を狭

められる。

所長「ちょっと。私の話を聞きなさいー！ー！ー！ー！」

お嬢ちゃん、悪いな。だが、そんなことを言っている場合ではないんだぜ。

「マシユ、所長と坊主を守れ！相手は俺がやる」

マシユ「はい！」

無意味かもしれないが三人の立ち位置の中心にバブルシールドを展開し、M A 3 7 アサルトライフルを撃った直後に骸骨野郎の矢が展開したバブルに当たったが、弾かれていった。

片づけるのに一分も掛からなかったが、この敵からの殺意じゃない。

もっと研ぎ澄まされたいで制御されているはずだ、かなり厄介なやつだな。

全く、チーフのおかげで敏感になっちまったよ。

「周囲の警戒は俺が引き続きしておくぞ」

マシユ「お願いします」

しかし、お嬢さんはは意外に悪い奴じゃねえな。

なんか無理にキャラづくりをしているような気がしてするな。

聞いている限りだと坊主と仲良くなってるなによりだが、また来やがった。

ライフルをぶっ放して倒して、また警戒だ。

平和なもんだ。これがコヴナントだったらずっと襲撃されてるな。こんな市街地
な。

カルデアは人理を守る多国籍組織ということだけは分かったが、これは俺の第二の人
生が大変なことになりそうだな。

人類の危機を救うことから逃げることはどうやら許してもらえんようだ。

続く？